

深川（ふかがわ）製磁と参考館

1894年に深川忠次（ふかがわちゅうじ）（1871～1934）が深川製磁を設立して以来、その工房と工場はほとんど変わっていない。欧州を旅した忠次は、英国の有名メーカー・ウェッジウッドやドイツのマイセン磁器など西洋の磁器メーカーが用いる技術を学んだ。

海外への輸出歴が長く、佐世保（させぼ）海軍基地とも近かったことから、19世紀（1800年代）の終わり以来、会社では多くの大使や海軍将校をもてなしてきた。貴賓室には、このような高官たちが滞在中に装飾を施した記念の陶芸品が展示されている。

1910年、深川製磁は磁器のテーブルウェアの納入者として宮内庁御用達を拝命した。本店の2階の参考館は歴史を感じさせる展示室となっており、リクエストをすれば、皇族の方々のご成婚やご誕生など皇室の重要祝賀行事のほか、晩餐会や日常生活でお使いになっているものとまったく同じ御食器類を見ることができる。これらの器にあしらわれている花や動物などの多くのシンボルは、皇族にとって特別な意味を持つものである。

忠次の会社に対する思いを表すため、深川製磁の商標にも象徴主義が用いられている。これまで様々な目的に対して様々な商標が用いられてきたが、歴史的に重要とされてきたのが富士山の流水である。富士山は日本の最も有名なシンボルのひとつで、流水は貿易の流れを表している。